

2003年 1月下旬号 出版ニューズ

〈民主〉と〈愛国〉

戦後日本のナショナリズムと公共性

◎

小熊英二著

戦後日本を形成した思想を、ナショナリズムと「公」にかかわる言説を軸に、敗戦直後から1970年代にかけていかに変遷してきたかを考察する。著者がいう言説とは、ある社会の特定の時代において支配的だった言葉の体系・構造を指す。具体的には、「市民」「民族」「国家」「近代」といったキーワードが戦後史のなかで、どのように生み出され論調として展開されてきたかの検証作業である。

時代区分としては、1995年を節目にした「第一の戦後」と「第二の戦後」の違いを浮き彫りにすること、そこから戦争体験を持つ戦後の知識人——丸山眞男、大塚久雄、竹内好、吉本隆明、江藤淳、鶴見俊輔、小田実——らの影響を、戦後歴史学の始まりから、戦後教育と愛国心、講和と独立、60年安保闘争と大衆社会、ベトナム反戦と全共闘など、戦後過程を追いながら明らかにする。戦後思想とは何かをトータルに描きだした労作である。(A5判・960頁・6300円・新曜社)